

戦時中に殺処分されたゾウを守った動物園がある。その実話を基にした合唱組曲「ぞうれっしゃがやってきた」を30年以上歌い継ぐ川口市の合唱団が、来年6月の公演に向けて参加者を募集している。動物園の存在は、平和あつてこそ。今も戦火が絶えない中、「歌うことで、子どもたちに生きる喜びを体感してほしい」と呼びかける。

(出田阿生)

ぞうれっしゃ 一緒に歌おう

24日から練習開始

1991年の初演以来、延べ5千人が歌った「川口ぞうれっしゃ合唱団」。コロナ禍で中断もあったが、2年に1度のペースでステージに上ってきた。団員は公演ごとに募集し、親子や3世代での参加も多い。来年に向けた練習は今年24日に始める。

「ぞうれっしゃ」の舞台は名古屋市の東山動物園(現在の東山動植物園)。太平洋戦争末期、園長らが軍の殺処分命令にあらうたことで「マカニ」「エルドゥー」の2頭のゾウが生き残った。敗戦から4年後、「ゾウが見たい」という子どもたちの熱望に応え「ゾウ列車」が仕立てられた。東京や埼玉など各地の子どもたちを乗せて、名古屋へと走った。

川口の合唱団 来年6月公演



子どもたちの練習 (いずれも川口ぞうれっしゃ合唱団提供)

この実話を歌詞にした。「いくさの終わる日まで」「ぞうをかしてぐささい」など全11曲で物語が紡がれる。圧巻は、フィナーレに歌われる「ぞうれっしゃよ

生きる喜び 命の尊さを体感



昨年のステージ。大人から子どもまで幅広い世代が熱唱した



酒井敦さん

はしれ」。子どもたちが「小さなぼくたちでも心をつにすれば夢だってかなうと、信じようこそ」と声を合わせ、平和な世に生きる喜びを爆発させる。

これまで5回の公演で指揮者を務め、今回も指揮を担当する東京芸大指揮科教授の酒井敦さん(63)は、歌詞に出てくる「人間の命」というフレーズに「この曲のメッセージが凝縮されて

いる」と話す。指揮していると「この言葉を歌う時に、歌い手全員の思いがうわーっと集まってくる感覚がある」と語る。思想信条も関係なく、心がつながる。その瞬間、震えるような感動を覚えるという。茨市出身の酒井さんも、小学生時代に学校で配られたチラシを見て、市内の少年合唱団に参加。音楽の世界に引き込まれた経験がある。

合唱団代表の荒木紀理子さん(69)は「参加者は幼児から94歳まで幅広い。特にお子さんに、この歌の素晴

購読のお申し込み
0120-0266-9999
配達・集金お問い合わせ
03-6910-2555
03-6910-2556
広告のご用命
048-8322-1181

らしさを体験してもらえたら」と話す。過去には不登校の子も参加。合唱団は「安心できる居場所」を目指す。「どんな人でも生きづらいと感じることがあると思う。歌うことで仲間とつながったり、大事なものを見つけてほしい」

本番は来年6月22日、埼玉会館大ホール。練習予定日は毎月第2、第4日曜(本番前は毎週)。ホームページは「川口ぞうれっしゃ」で検索。問い合わせは荒木さん(電)夜間のみ、ファクス兼用)048(268)9256へ。